

登場人物

- ・カイト（男） 小学5年生又は中学1年生
- ・かや（女） 中学1年生又は中学3年生

照明手前のみ。椅子が二つ舞台中央よりやや後ろの上手側、下手側と離れておいてあり、カイトは上手。かやは下手側の椅子に座っている。

かやはだらしなくあしを投げ出し、うつろな目をしている。

カイトはそんなかやを優しく見つめている。

この時のカイトは中1、かや中3。

かや 星が私を見て笑う。だから夜は嫌い。

カイト 星が？君を？

かや 星がどこにいても付いてきて、笑ってる。

カイト きつと君が好きなんだよ。

かや 昼は好き。星が見えないから。

カイト そうだね。僕も昼の方が好きかな。

かや カイト。カイトは笑わないね。

カイト えっ？

かや 私を見て笑わないのはカイトぐらいじゃないかな。

カイト 君を笑うって？どうして？

かや バカにしたり、下に見たり、可哀想になって同情したり。そんな風にしなね。

カイト かやにそんなことするはずないだろ。

かや どうして？

カイト えっ？

かや どうして笑わないの？みんな笑う。すれ違う人もみんな。

カイト 気のせいだよ、かや。

かや ううん。カイトは知らないんだよ。

カイト 知らないって？

かや 私がどんな世界に生きているか。

かや、立ち上がる。

かや（回想）いつの日からか、私の周りが暗くなった。人の声が聞こえなくなったり、人の顔がわからなくなった。そんなことが起こるなんて、思ってもみなかった。どうしていいかわからなくて、誰にも相談出来なかった。自分でも説明出来なかったし。相談出来る人もいなかった。

カイト、立ち上がる。

カイト（回想）かやの様子が違ってきたのは、かやが中学に上がった頃だったと思う。僕はまだ小学生で、かやが中学の制服を着ているだけで、急に大人になった気がして。帰り道で会っても、ランドセルを背負っている自分が嫌で話もろくに出来なかった。だから、何かが変わたと気付いたのは、かやが中学に上がった冬の終わりの頃だったと思う。

照明手前のみ。ここからカイト小5、かや中1。かや、歩き出す。

カイト（独白）かやが歩いてた。それもとてもゆっくり。ふらりふらりと歩いているから、具合が悪いのかと思っただ。後ろから見ている、なんだかとても不安になった。

思わず走り寄り、かやの肩を叩いた。とても軽く。

かや 誰？何？

かや、びっくりして座りこむ。カイト、かやの横にかがむ。

カイト かや、大丈夫？体調悪いの？

かや 何だ、カイトか。

カイト 何だって何。失礼だな。

かや ごめんごめん。

カイト どうしたの、ふらついていただけ。

かや えっ、そう？

カイト うん、ふらふらしてた。

かや うーん、ちよっとお腹すいちゃって。

カイト ならいいけど。

照明奥のみ。

カイト (独白) かやは以前より、痩せているように見えた。背は少し伸び、首筋がくっきりして、手足は細く華奢で儂く今にも壊れそうで不安になった。

かや 私ね、人の声が聞こえるの。

カイト うん、普通聞こえるよ。

かや そうじゃなくて、人の心の声。

カイト 心の声？

かや 何を考えているのか。今怒っているのか。苛立っているのか。バカにしているのか。聞こえるの。

カイト 気のせいだよ。

かや はっきりと聞こえるの、その人と話していると。

カイト じゃあ、今僕から聞こえる？

かや 気持ち悪いって言ってる。

カイト (笑いながら) 僕が？言っていない。全然違うよ。

(独白) そう、全然違う。確かにどうしたのかと思った。体調が悪くて、気が弱っているのかなって。それより、僕は君と、かやと話をしていることが嬉しくて仕方なかった。気恥ずかしさから一年近く話をしていなかった。その間にかやは、大人びて、僕はドキドキして仕方なかった。だから、その時のかやの様子のおかしさは僕の頭からどこかにいつてしまった。

かや カイトは、そんなことないって言うけど、聞こえる。聞こえるから。

カイト、立ち上がる。かや、椅子に座る。カイト、かやを見つめる。

カイト (独白) かやの少し低い声。かやの猫みたいな目。かやの華奢な腕。かやのすべてを見て、すべてを記憶したい。かやの不安そうな顔がとても愛おしくて仕方なかった。

かやのすべてを抱きしめたかった。僕はまだ子供だけれど、君を守りたい。それがどんな形であらうと。

照明手前のみ。

カイト (独白) かやのこの間の様子から僕は、かやの家を訪ねることにした。小さい頃はよく家に遊びに行ったけれど、ここ何年かは来ていない。おじさんとおばさんは今の時間はいないと思う。かやの家は共働きた。夜遅くまでいつもかやは一人きりだった。

玄関のインターホンを鳴らす。ピンポン(音)。

カイト 応答はない。

かや、立ち上がる。カイト、もう一度鳴らす。ピンポン(音)。

カイト 少し間をおいてかやが出てきた。

かや カイト、どうしたの。

カイト かや、この間、体調悪そうだったから様子見に。

かや そうだったかな？大丈夫だよ。

カイト ねえ。中入ってもいい？

かや いいよ。でも散らかってるよ。

カイト いいよ。そんなの。お邪魔します。

かや、椅子二つを中央へ。照明手前、奥両方。

カイト (独白) かやの部屋はきれいに片付いていた。ホコリもなく、整頓され、かやのお城のようだった。

かや カイト、この部屋に入るの何年ぶりかな。おじさんとおばさんは元気？

カイト うん、元気元気。

カイト かやの部屋きれいだね。ぬいぐるみも変わらずあつて。

かや うん、そう、この子たちが話し相手。こっちがペペちゃん、こっちがピートくん、はい(手渡す)。

カイト ピートくん。へえ。名前あるんだね。

かや もちろん。

カイト かや、中学で友達は？

かや 仲良い子はあんまりいない。カイトはたくさんいそうだね。

カイト たくさんいるよ。サッカーしたり、くだらない話で盛り上がったたり、授業中もいたずらしたりして。学校楽しいよ。

かや いいなあ。カイト、サッカーしてるんだ。昔は野球してたよね。

カイト 野球もしてるよ、日曜日に。

かや じゃあ今度観に行こうかな。

カイト うん、おいでよ。観てるだけでも楽しいよ。かやは何してるのが楽しい？

かや うーん、なんだろ。この子達を作ることかな。

カイト かやが作ったの、このぬいぐるみ。スゴイね。器用だね。

かや そうでもないよ。この子たちは何も言わないし、聞こえないから。

カイト、体を正面に向け、

カイト (独白) かやは小さな頃から繊細な子供だったと思う。年上だったけれど、そんな差は感じなくて。女の子って、こういうものなのかと思っていた。けど、クラスの女子たちは、全然うるさいし、叩いてきたりとか、かやとはまるで違っていた。今思えば、僕の中の女の子はかやだけだったのかもしれない。

かや カイトは、聞こえない？心の声。

カイト 僕は、うーん、鈍いのかな、聞こえない。

かや そっか。いいな。そうだね。普通、そうだと思う。

カイト かや、僕がかやの味方だよ。

かや うん、ありがとう。でもね、カイトは普通だから。

カイト 普通って。

かや 私がおかしいのはわかっているの。でも、どうしようもないの。だって勝手に聞こえてくるから。

カイト ……辛いね。

かや カイト。何で辛いつてわかるの。何が辛い。

カイト いや、だって、人の考えていることがわかるってことですよ。それってみんなが隠しているものが見えてしまつてことですよ。見たくないよ。

かや カイト。そう。そうなの。私の言ってること、わかってくれたのカイトが初めて。学校の先生も、クラスの子も親も私のこと変な目で見て、可哀想だねって言つてどこかへ行つてしまふ。でもね、カイトが今、こうやって、わからないけど、一生懸命聞いてくれるでしょ。それがとても嬉しい。

カイト だって、かやのこと心配だし大事だから。

かや ありがとう。

カイト 今日はそのそる帰るよ。

二人、立ち上がる。

かや うん、また来てね。

カイト うん。また来るから。

照明手前のみ。

かや (独白) カイトが私の話を聞いてくれた。とても嬉しかった。誰も聞いてくれなかった。自分がおかしいことはわかっている。それでも、誰かに聞いて欲しかった。ただ聞いて欲しかった。気持ち悪いとか、狂つてるとか、そんな言葉ばかり向けられて、苦しかった。でもカイトは聞いてくれた。

カイト (独白) かやの話を聞いて、よくわからなかった。かやのことが心配だし、気になるのは変わらない。でも正直、かやの言っていることはわからない。僕がまだ子供だからかな。

かや カイト、この間は話を聞いてくれてありがとう。本当に嬉しかった。

カイト いや、そんな。

(独白) 僕はかやとどう接すればいいかわからなかった。だって、人の心の声が聞こえるって言われても、どうしたらいいかわからない。これが友達やクラスメイトであれば、距離を取ればいい。他にも楽しいやつらがいるから。でも、かやは一人しかいない。かやのことが好きで、かやのことを守ってあげたくて、でもかやの言っていることがわからなくて。僕は混乱していた。

かや カイト、今からうちに来て。

カイト うん、あっ、でも今日は習い事があって。ごめん。

かや そっか。残念。また来てね。

カイト うん。わかった。

かや、椅子に座る。

カイト (独白) どうすればいい。かやの話を聞くのはいい。うん、うんとうなづいて、大変だね、辛いねって。かやの気が済むまで聞けばいい。でも、僕にはわからない。辛いねって言っても、かやの本当の辛さはわからない。話を聞いてもらえなくて辛いのか。頭がおかしくなって辛いのか。

今、僕はかやの頭がおかしいと言った。かやの頭がおかしい。僕の好きな人は頭がおかしい。狂っている。僕はどうしたらいい。

かやが普通に学校へ行って、普通に友達と笑って過ごして、普通に家族仲良くて。

普通ってなんだ。普通って誰が決めるんだ。僕は何を基準にかやが、君が普通じゃないって思ったんだらう。君がフラフラと倒れそうに歩いていたこと、心の声が聞こえるということ。家が寂しいこと。僕は、君と一年近く話していなかったのに、この何日かで、君に恋をして、君に絶望した。

照明奥のみ。カイト、かやの手を取り、立ち上がらせる。

ここから、カイト中1、かや中3。

かや、カイトに背中を向ける。

かや カイト、あのね、私、死んでしまおうかな。

カイト かや、そんなこと言わないで。

(独白) かやの話を聞くようになって、どれぐらい経っただらう。僕も中学生になり、かやと同じ中学に通っている。かやは今ほとんど学校へ行っていない。

かや ねえ、だって、私生きていない意味ないでしょ。何も無いもの、私には。ただ、違うのは人の心の声が聞こえるだけ。

カイト かや、そんなことない。僕は君に生きていて欲しい。

かや 私はいない方がいいのよ。

カイト 僕は君がいなくて生きていけない。

かや どうして？

カイト 君が好きだから。59

かや そうなの？

カイト そうだよ。

かや 初めて聞いた。

カイト 気付かなかった？

かや うん。

カイト 人の心の声が聞こえるのに？

かや あれ、そうだよ。おかしいね。

カイト そうだよ。僕は君にずっと好きだって言ってたんだから。

かや 本当に？

カイト うん。ずっと。

かや カイトの声を聞こえないのかな。

カイト 聞こえて欲しかったけど。

かや おかしいね。

カイト かや、好きだよ。

かや うん、ありがとう。

カイト かやは僕のこと好き？

かや 好きだよ。

カイト かやの好きは僕の好きとは違うよね。

かや えっ？

カイト たぶん違うよ。

かや そうなのかな？

カイト かやの中の僕はどんな存在？

かや 大事だよ。カイトがいなければ私はもっとおかしな人間になっていたと思う。

カイト 僕が好き？

かや 好きだよ。

カイト うん、ありがとう。

かや、椅子を中央前へ移動させ、座る。

カイト (独白) 僕の声は君に届かない。君が死にたいと言ったとき、僕の心がどれほど凍りついたか。僕の心の声は君に届かない。僕の心の声だけが君に届かない。君の心は僕の心を通り過ぎ、別のところへ行ってしまう。僕は君の心だけが欲しいのに。僕の心を見えてくれるまで、ずっとそばにいようと思っていたけど、それももつそろそろ限界かもしれない。

カイト かや、屋上で何してるの。

かや カイト。いたの。

カイト かや、ダメだよ。

かや 何がダメなの。

カイト かや、何しようとしてる？

かや 終わりにしようよ。

カイト ダメだよ。

かや どうして。

カイト どうしても。

かや 私が私自身をどうしようとする自由でしょう。

カイト うん、そうだね。でもね、僕は君が好きなんだ。君に死んでほしくない。

かや カイト、死にたい心はどうすれば生きる心になるのかな。

カイト わからない。わからないけど、かやのそばにずっといるから。

かや カイトが話を聞いてくれて、いつも聞いてくれて、辛いよねって言うってくれて、嬉しかったよ。本当にありがとう。

カイト そんなこと言わないで。もっとかやの気持ちわかるようになるから。

かや 無理だよ。私の心は私だけのものだから。

カイト かや、かやの心に残るにはどうしたらいい？どうすれば僕のことを思ってくれる？

かや わからない。

カイト、椅子に座るかやを押しつけ、椅子に登る。

カイト かや、僕はね、かやのことが好きすぎて、おかしくなっちゃった。僕がどれだけかやのことが好きか、これでわかってくれる？かや、愛してる。

カイト、椅子から飛び降りる。

(カイトが足を上げたら) 暗転。

薄く救急車の音。照明後ろのみフェードイン。

かや カイトの声は聞こえない。

暗転。